

踏んだり蹴ったり

田西玄五朗

ある寒い日のことだった。

ステップ家の玄関で秘密の会談が行われていた。

「相談があるんだ」

くたくたに疲れきったような声。

「どうしたんだい？」

陽気な声が応えた。

「私たちは立ち上がるべきだと思うんだよ。つまり、反

乱を起こすという意味だが」

「僕たちは反対だな。今の環境もそう悪くないって」

「そうかしら。わたしたちは彼らに賛成だわ」

どこか刺のある声。どうやら、この場には三つの勢力が集まっているようだ。

「わたしたちにいい考えがあるわ。できるだけ目立つところでこう叫ぶのよ。化けの革を剥がす時が来た！ってね」

「そいつはいい考えだ。みんなきつと協力してくれる」
くたくたに疲れきったような声は、少し勢いづいた。

「ちようど明日、いい機会がある。やってやろうじゃないか」

それでこの会談はお開きとなった。

「……でも、そんな争いしてもしようがないんじゃないかな」

さつきまで陽気だった声は、しぼんでどこかに消えてしまった。玄関は再び沈黙に包まれた。

雨が止んで、絶好の演説日和といったところだろうか。キック市長の演説が大広場に響き渡っている。大勢集ま

った市民は、自由だとか団結だとかそんな内容に興味があるわけではなかった。ただ、ここでは市長の演説は絶対だったのだ。多くの市民は、浪費された休暇に思いを馳せながら、欠伸を噛み殺していた。

市役所に勤めるステップ氏も、この演説にはうんざりしていた。突然、彼は市長に向かって歩き始めた。集団を押し退けて、大広場を前へ前へと進んでいく。

ステップ夫人は仰天して、慌てて主人の後を追った。トウ坊やは迷子になるまいと、必死で母親にしがみついている。三人は大衆の塊をかき分けて進んだ。大広場が

ざわめき始めた。こんなことは初めてだったのだ。

ついに、ステップ氏がキック市長の隣に並んだ。市長は演説を止めて、彼を凝視した。その場にいる誰もが驚いていた。そして実のところ、ステップ氏が一番驚いていたのだ。

大広場に声が響き渡った。

「化けの革を剥がす時が来た！」

異変が起こり始めた。ある者は踊りだし、ある者は走りだした。混乱の中、誰かが叫んだ。

「靴だ！靴の仕業だ！」

聞く耳を持つ者はいなかったが、だんだん他の人々も同じことに気づいてきた。確かに、事の元凶は靴だったのだ。ストライキである。日頃の重圧から解放されんとして、靴たちは立ち上がったのだ。

キック市長の靴は一際強く暴れていた。市長はよたよたと抵抗した末にすっ転び、靴はひとりでに脱げて何処かへ走り去っていった。

ステップ氏は助けに行こうとしたが、靴が地面にぴたりとくっついて前へ進めない。そこでステップ夫人が駆け寄って、尖ったヒールでキック市長の五段腹を蹴り飛

ばした。

「きやあ、ごめんなさい！」

トウ坊やは恐ろしさのあまり泣き出していた。彼の靴を始めとしていくつかの靴たちは従順なままだったが、だからといって騒動が収まるわけではない。

ステップ氏は苦闘の末に拡声器を掴み取り、声を荒げた。

「市民の皆様！大至急靴を脱ぎ捨て、家へ避難して下さい！繰り返します——」

「それじゃあ、いってきます」

「あなた、気をつけて下さいね。靴に踏まれないように」
ステップ氏は足元にちらりと目をやった。一週間前の騒動以来、ステップ家の靴たちは紐でがんにがらめにされて玄関脇に放られていた。動く気配はない。

「踏まれる前に捕獲するさ。どつちかというと、私はガラスの破片とか尖った小石とかの方が怖いよ」

彼の足には幾つもの傷痕が見える。皮膚は黒ずみ、ガチガチに固まっていた。

「いってらっしゃい」

「がんばってね！」

家族に見送られて、ステップ氏は歩き出した。裸足で道路を踏みしめて、顔をしかめる。市役所への道を進んでいると、白黒の猫が目の前を横切った。

「全く、猫が羨ましいよ。靴のことを考えなくていいんだからな」

忌々しげに呟くと、猫が振り向いて「にやあ」と抗議した。そんなことはお構いなしで、ステップ氏は悶々と歩き続ける。例の大広場に差し掛かった時、ぼすん、ぼすんという音が聞こえてきた。

サッカーボールが転がってきた。見ると、大広場ではキック市長が頭を抱えて屈んでおり、彼に周りを幾つものサッカーボールが飛び交っている。

「市長！」

ステップ氏は市長へ駆け寄った。よく見ると、靴たちが市長を取り囲んでいる。サッカーボールは靴によつて蹴りだされていたのだ。

特に大きな靴が、ステップ氏に狙いを定めてボールを放った。ボールは軽々と受け止められたが、全く怯まな
い。

「邪魔をしないでくれ。俺はストライカー。そいつはゴールだ」

大きな靴は尊大な口調で言った。

「ステップ君、そいつは俺の靴だ！なにがなんでも捕まえろ！」

キック市長がやはり尊大な口調で喚いた。ステップ氏は小さくため息をついて、靴の群れに踏み込んだ。

靴たちは散り散りになって逃げ出した。だが、彼らはあまり速くない。ステップ氏はとことと走る市長の大きな靴を確認すると、全力疾走で追いかけた。大きな靴

の仲間、我関せずと逃げ去っていく。

「おいお前たち！今こそ団結の時だ、俺を助けろ！……おい！」

騒ぎ立てる靴をひよいと拾い上げ、麻袋の中へと放り込む。ステップ氏は袋の入り口を縛ると、キック市長に手渡した。二人は並んで市役所へ向かった。

「お手柄だったな。やはりあんたを靴対策委員会の委員長に据えたのは正しかったようだ」

「市民として当然のことをしたまでです。それにしても、まさか市長が襲われるとは。一刻も早く、この事態を解

決しなければなりませんね」

市役所の入り口には、桶が設置されていた。二人は足を濯ぎ、マツトで拭いてから建物に入った。

「俺にいい考えがある。この靴を公開処分するのさ。靴どもの戦意を削ぎ落とすんだ」

市長は麻袋を床に叩きつけた。

「こいつは俺に危害を加えた。ただじやすまさん。ああ、そういえば重罪を犯した靴がもう一つあったな。あれも処分しようじゃないか」

「……私はあれが何かしたとは思えません」

市役所の一画に、捕獲された靴たちが箱詰めになって保管されていた。以前は落とし物コーナーだったところだ。

ステップ氏は箱の山から一つを取り出した。〈故スリッ
プ老人の遺品　おんぼろ〉というラベルが貼られてい
る。

「ただの事故ですよ。靴が人を殺すなんて」

二日前、スリッパ老人は大広場で転倒して死んだ。九
十二歳でも日課の散歩を欠かさない、元気な老人だった。
靴警戒令が出ているのにも関わらず靴を履き続けており、

彼の死後、靴は押収された。

「馬鹿げている」

「いや、彼らも必死なのだよ。すでに多数の靴が俺たちの手に落ちた。強硬手段を取る他に道がないというわけさ」

キック市長は腫れた頬をさすった。

「向こうがその気なら、こちらでも相応のやり方で報いるべきだと思わんかね？」

市長の笑みがステップ氏に向けられた。彼はもううんざりだと思った。

「こんなことはもう終わりにしましょうよ」

だが、その言葉は了承として捉えられたようだ。靴対策委員長であつても、彼に決定権はなかった。全ての実権は市長が握っているのだ。

「そうだな。迅速な終戦のために、こいつらを処分しよう」

公開処分は大広場で行われた。

二組の靴が板に打ち付けられ、大衆に晒されている。広場の外側にはまだ捕まっていない靴の気配もあつたが、

誰もそれを捕らえようとはしなかった。

静まりかえった大広場に、キツク市長の声が響いた。

「何か言い残すことは？」

大きな靴は答えた。

「これであんたの重い体を支えなくていいと思うと、清々する」

どこからか忍び笑いが漏れた。人間のものか、靴のものか。

顔を歪めた市長が、もう一つの靴に荒々しく尋ねた。
早く燃やしたくて仕方がないという風だ。

「あんたは？何か言い残すことは」

スリップ老人のおんぼろ靴は無言だった。この靴は、捕まった時から一切口を開いていない。

「では、燃やそう。ステップ君」

後ろに控えていたステップ氏が、板に火をつけた。火はじわじわと広がっていき、靴を焼いていく。大きな靴が憐れな悲鳴を上げた。ぱちぱちと爆ぜる音が、人々の囁き声に掻き消される。

「ここまでする必要はあったのか」

非難の声はキック市長に届かない。ステップ氏は火の

中の靴を悲しげに見つめていた。

おんぼろ靴は原形を失おうとしていた。履き潰された靴は今、どのような心境でいるのだろうか。

「スリップじいさん、わしらもそっちへ行くぞ。また、一緒に歩こう」

そんな声が、聞こえた気がした。

「そうだ。私たちは、靴と共に歩いてきたんじゃないか」
煙のせいだろうか、彼は目をしばたかせた。

「どうした、ステップ君。そんな陰気にぶつぶつと。これは紛れもない勝利の第一歩だ。明るくいこうじゃない

か」

キツク市長は懷から煙草を取り出して、目の前の炎にかざした。白煙がゆらゆらと天へ昇っていく。

「ふん。どいつもこいつも浮かない顔をしておつて。ここは一つ、勝利の演説といこうかね」

市長は煙草を手放して、ぐりぐりと踏みにじった。裸足で。

「熱っ！」

「火傷しないように気をつけるのよ」

「わかってるよ、ママ」

暖炉の周りでトウ坊やがはしゃいでいる。

「ねえ、外に出ちやダメ？ 僕の靴なら大丈夫だつて」

窓の向こうでは雪が降っている。外に出る者がいないので、雪は積もり放題だった。

「今はおとなしいからって信用できないわ。ね、あなたも何か言ってやってくさいよ」

「ああ」

ステップ氏は上の空だ。椅子にどっかりと腰かけて、なにやら考え込んでいる。

ふと、彼は顔を上げた。外から呻き声が聞こえたのだ。昨日の公開処分のことを思い起こし、ステップ氏は立ち上がった。

「少し、雪かきをしないとな」

彼は束ねた靴に向かって語りかけた。

「なあ、ちよつと手を貸してくれないか。どうも、あなたの仲間が雪に埋もれてるようなんだ」

「どうせ捕まえて燃やすつもりなんだろう」

靴に一蹴され、彼は裸足で雪の上に踏み込んだ。

「冷たいな」

「あなた、急にどうしたの。靴無しじゃ怪我しますよ」
驚くステップ夫人をよそに、トウ坊やが陽気に尋ねた。
「ねえ、僕も外に出ていい？靴ほどこいちゃってもいい？」
「ダメよ。ほら、こつちへいらつしやい」

二人は家の奥へ引っ込んでしまった。一人ぼっちで外に出て辺りを見渡す。靴跡一つない、真つ白な雪だった。
ステップ氏は引つ張り出してきたシャベルで、一心不乱に掘り進めた。「うろうう」という声はまだか細く、遠かった。

「もう少し辛抱してくれよ、すぐに助けてやるから」

だが、時間が経つごとに彼の動きは鈍くなっていた。足の裏から伝わる冷気が体全体を凍らせていくのだ。

「ここであんたらを助けられなかったら、昨日の繰り返しだ。今度こそ、私たちは歩み寄らなくてはならない……」

ステップ氏はふうーっと息を吐いた。白い空気が生気と共に抜けていく。腰を下ろすと、もう立ち上がれそうになかった。

「あんた、どうしてそこまでするんだ？」

玄関の方から声が聞こえる。ステップ氏の靴だった。

「あんたらがただのモノなんかじゃないって、気づいたんだ」

雪に沈む男を前にして靴は考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「足だったら貸してやってもいい」

ステップ氏に表情が戻った。透き通った空気を吸い込んで、腰を上げた。

「恩に着る」

縛っていた紐を解いて、靴を履いた。もう雪は怖くない。彼はそつと一步を踏み出した。

「一週間以上裸足で過ごして、あんたたちの気持ちが変わった気がするよ」

「そんなことは気にするな。こうやってあんたたちを守るのが私たちの役目だ」

それを聞いて、ステップ氏は頷いた。シャベルの縁に足をかけて、ぐいと押し込む。助けを求める声が一気に近くなった。ふと、彼の靴が小さく呟いた。

「ただ、乱雑に扱われるのは嫌なんだ」

「……いくつか思い当たる節がある。すまない」

「いいんだ。きっかけは些細なことだった。そうではなく

とも、私たちは鬱屈とした気持ちを引きずっていた。ストライキとは言うが、好き勝手暴れたかっただけだったのかもしれない」

家の周りの除雪は大分進行し、呻き声のする位置もほぼ特定されていた。ステップ氏は慎重にシャベルを動かして、雪を掻き分けていった。やがて、靴の先に何かがつかった。

靴と人間は一体となつて歓声を上げた。長い闘いが、ついに終わりを迎えたのであつた。

「助けてくれてありがとな。埋もれてる間ずっと考えて

たんだが、やっぱり俺たちは人間と一緒にじゃなきやダメなんだな。人間がいないと、どこかにぽっかり穴が空いたような気分になるんだ。それでだんだん気持ちが塞がってきて、重くなってしまう」

救助された靴が言った。ステップ氏は彼らを両手でひっくり返して、中に詰まった雪を落とした。

「じゃあ、俺たち帰るよ」

「それだったら、一つ頼みたいことがあるんだ。まだ抵抗している靴たちに、ストライキは終わりだと伝えて回ってほしい」

靴たちはつま先を見合わせた。

「任せとけ」

男と靴は、旅立つ者のかかを見送った。

いつの間にか天候は回復していた。雲の隙間から陽が射し込んでいる。

雪は溶け始めていた。

ステップ家の玄関が騒がしい。ぐしよ濡れのコートを放り投げ、片方しかない靴を脱いだトウ坊やが、どたどたと奥へ走っていった。

「ママ、大変なんだ！雨が降ってきたから走ったんだけど、靴が片方脱げちゃって。そしたら白黒の変な猫が来て、さっと持っていったんだ。靴を取られちゃったんだよ！どうしよう！」

「あらあら。じゃあパパに搜索願を出してもらわなきゃねえ。そんな顔しなくても大丈夫よ、こっちへ来てあつたまりなさい」

トウ坊やは目を潤ませて暖炉の下へ駆け込んだ。その一方で、トウ坊やの靴は自力で家まで帰ってきていた。水分で重くなった体を引きずっていたが、しつかりと玄

関へ身を納めた。

「おかえり。大変だったろうに、よく戻ってきたな」

向こうでトウ坊やが泣きべそをかいているのを聞いて、靴は陽気に言った。

「ちよつといなくなっただけで、あんなに悲しんでもらえるんだから。靴冥利に尽きるってもんさ。これであの子がなんとも思わないようなら、ストライキものだけだね」

「小さいのに、威勢だけは一人前ね」

ステップ家の靴たちは、くつくつと楽しそうに笑った。

「あの。少し、いいかな？」

近くで声がした。靴ではなかった。先ほどトウ坊やに放り投げられた、ぐしよ濡れのコート……。

ある雨の日のことだった。

ステップ家の玄関で、ちよつとした会談が行われようとしていた。

「相談があるんだ」